



アフリカの手話の世界探訪[3]

ろう者の学校・ カメルーン



国名「カメルーン」の手話表現

「ようこそ、私たちの学校へ」

ろう学校の校長が出迎えてくれた。ここはカメルーン西部の都市ブエア。カメルーン山の麓に位置するこの町に新しくろう学校ができた聞き、訪れた。

「この動物は何か？」

耳が聞こえない生徒たちに、先生が絵を見せながら教えている。授業のすべては手話で行われていた。この先生もろう者だからである。実際、この学校の10人の教職員のうち8人がろう者で、出迎えてくれた校長もろう者だった。

聞こえない先生ばかりでさぞかし不便だろう…という想像は当たっていない。教員も生徒も同じ手話で話しているので、お互いにことばの壁がなく、不便がないのである。

日本やドイツなど「先進国」と呼ばれる国々には、政策としてろう学校で音声言語を習得させることに力点がおかれていた。ろう学校から手話が排除され、ろう者の教員が教鞭をとることが許されない時代が続いた。

カメルーンには性能のよい補聴器がないためか、ろう教育では子どもたちの聴力に期待するのではなく、全面的に手話を用いて教える傾向がある。ろう児たちが自然に身につける手話で学ぶ姿は、ほのぼのとした平和な風景に映る。

「ろう児には、ろう者が手話で教えるのがよいのです。」

日本もそうしたらいいのではないですか」

このようにろう者の校長に言われ、いったいどちらが「先

亀井伸孝 Kamei Nobutaka (東京外国語大学)



カメルーンのろう者が運営する学校 (2005年、著者撮影)

進国」なのだろう…と考えさせられた。

かつて、アメリカの黒人ろう者牧師が、アフリカで手話によるろう教育事業に広く取り組んだ。この教育がもたらしたアメリカ手話に変容し、ろう者たちが運営する学校を通じて次世代のろう者たちへと受け継がれてきた。この学校は、アメリカ手話から派生したこの新しい自分たちのことばを「カメルーン手話」と名付けている。ろう者たちの手によって、新しい言語文化が各地に創られていく。

ろう学校は、ろう者にとって、音声言語という大海に浮かぶ島のような場所である。点在する島を伝って、手話言語の創造や伝播が起こる。ピジン・クレオール諸語を生んだカリブ海の島じまのように、アフリカのろう者たちの学校は、音声言語の世界からは想像もつかない歴史を見せてくれる。その全容が明らかになる日を想いながら、私はろう者たちの手話の場所を訪ね歩く調査を続けている。

【参考文献】 亀井伸孝. 2006. 『アフリカのろう者と手話の歴史: A・J・フォスターの「王国」を訪ねて』 明石書店

表紙写真 について

Alfred the Great

田邊祐司 Tanabe Yuji (専修大学)

テロ未遂事件の重たい空気が支配する昨年の夏、ミステリー・ツアーと称して友人が連れて行ってくれたのが、ロンドンの西南約120キロに位置する古都ウィンチェスター(Winchester)だった。かつて、バイキングの攻撃に対抗する要塞だったこの街の中心では、敵の侵入を防いだウェセックス(Wessex)国王、アルフレッド大王(Alfred the Great)の像が街を見渡していた。その台座に刻んであったのが、このÆLFREDである。今でもÆSOPやÆONな

どに残るÆは、合字(ligature)である。綴り方をながめるだけで、思いははるかなる古英語の昔に飛んだ。

ウェセックスでは、この大王の指揮のもと、聖書の翻訳はもとより、王国の伝承の記録などが盛んに行われたという。大王自らも古典語をたしなみ、翻訳にあたってと伝えられている。その言語政策のおかげで、ウェセックス方言は9世紀末には古英語の標準語となり、それが現代英語の土台となった。アルフレッド大王がいなかったら、わたしたちが今、学ぶ英語は違っ

たものになっていた。いや、ひょっとしたら英語そのものも存在せず、こんなにも悩まされることはなかったのかもしれない。

歴代の王やジェーン・オースチン(Jane Austen)が眠るウィンチェスター大聖堂、映画「ハリー・ポッター」シリーズの hogwarts 魔法魔術学校の建物の一部に使用された名門ウィンチェスターカレッジなどを散策しながら、そんな歴史のミステリーを体感させられた、文字通りミステリー・ツアーだった。

